
アドレサンス・コード

朧夜あずり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アドレスランス・コード

【Nコード】

N8672Y

【作者名】

朧夜あずり

【あらすじ】

20XX年、太平洋に突如発生した巨大な穴。穴から現れ、ヒトを喰らう異形の存在。ヤツラに対抗する術の無いまま20年が過ぎた。

普通の女子高生として過ごしていた音環ねわはある日、意思の疎通が可能な異形と出会う。そいつは言った“我々を止めてくれ”と。少女の思い。異形の思い。異形を狩る者たちの思い。思いの法則を、絆を、言葉を紡ぐ……絶望の喜劇。

始まり

平穩、とは何なのか。

今となつては、もう誰も分からない事だ。

科学が発達し、様々な事象の本質を解き明かしていったこの時代に。

突然起きた、謎の出来事。

人為的には有り得ないソレが、突発的に発生したお陰で、世界は壊れた。

「音環？音環ー？」

「ん？凜？なあに？」

「…また空眺めてたの？」

「う…うん」

凜。日下部凜は、私 小此木音環 のクラスメイトで友人。

ショートカットの栗色の髪を弾ませながら、窓際に立っていた私の所に来た。

“また”と言う凜の顔はやや曇っている。空なんて眺めても仕方ない、とは何度も言われた。「大体、あんなもの見てどうするのよ」

くいくい、と私の背中まである長い黒髪を引っ張りながら、もう何度と無く交わした会話を繰り返す。

「いたたた…。空はもう返って来ないのかなって…」

青空。晴天。空色。

色んな言葉があるけれど、私たちは見た事が無い。

分厚い雲が空を常に多い、日の光は僅かに入ってくるものの、どこまでも気分が落ち込むようなモノクロの空。

昔の写真で見るような…青い綺麗な空はもうどこにも無い。

20年前に、静かに、しかし唐突に現れた巨大で深い円形の世界溝。太平洋のど真ん中にできた、まるでブラックホールのようなソレ。

ブルーホールと呼ばれるソレは、初め上空を飛んでいた旅客機に発見された。一時間前に同じルートを飛んでいた旅客機では確認されなかった事から、予兆も何も無く唐突に出現したことが分かる。

発生しただけならば良かった。深さとでかさ故に、地球上に存在する他のブルーホールとはレベルが逸していたが。ただ、それだけならば、良かったのだ。

しかし、世界を壊したソレの恐ろしさは桁違いだった。

そのブルーホールから霧状の謎の物質が発生し、上昇して膜となり雲のようになった。謎…と言われるのは、本当に分からないからだろう。地球上のどの物質とも構造の異なる物。

ブルーホールのもたらしたものは、それだけじゃない。もっと恐ろしい異形の存在。かつての生態系を根源から破壊しかねないもの。

「音環、そろそろ授業始まるよ」

凜の声に、ふと思考をやめる。全ては私が生まれる4年前に現れた事で、現在20歳未満の人はその時の世界中のパニックを経験しなくて良かった…と取るべきなのか。平穩を知らずに育ったことを嘆くべきなのか。

「いーかげん、考え込むのやめなよ」

凜の呆れた顔がすぐ近くにあつて、すぐにごめんと謝る。

「今から何だっけ？」

「公民！」

間髪入れずに返答が飛んでくる。苦笑しつつ机の上に教科書をだす。私たちは高校生で、勉強が本業だ。ネガティブな世界情勢を少しだけ頭の隅に追いやろうとしたけれど。公民の教科書の最後辺りのペー지를パラパラとめくると、上空から写した巨大なブルーホールの写真。とても有名な一枚だ。

身近な事でもあるのだと思い知らされる。

パタリと教科書を閉じた瞬間。

授業の開始を告げるチャイム…が、サイレンに変わった。

「シエルをー！」

クラス委員長が鋭く叫び、一番前の席の子が、黒板横の大きなレバーを思い切り下ろす。

ガシャン！ ガシャン！

素早く、窓全てに鉄製のシャッターが下ろされた。

日の光が完全に遮られた薄暗い教室の中。女子生徒も男子生徒も、震えながらお互いの肩を抱き合う。私の隣に座った凜も、触れ合った肩が小刻みに震えていた。

「B…?J…?」

殺戮を予測したが、しかしその後には続くはずの悲鳴は無かった。

代わりに響いたのは、外から聞こえる、降り注ぐような銃声。

「と、討伐隊だ…」

安堵感が広がる。いつの間にか張り詰めていた空気が僅かに緩む。こんな非日常が日常。

20年前に現れた巨大な穴によって。

ブルーホールから出てくる、異形。

実際には見たことが無いが、ニュースやワイドショーで時折映る異形の存在は皆、固い鱗に覆われ昆虫や動物に近い形態を取り、大きさは人よりも一回り程大きい。

それらは海から現れた魔物。

神話から名前を取りレヴィアタンと呼ばれていたが、後に空に浮かぶ雲から、あるいは稀に地上に発生する黒い霧から現れることも報告された。レヴィアタンは海の生物に近い形態を取り、棲息範囲も海や水の中だ。

飛行能力を有する存在は、ジズ。地上に棲息するのはベヒモス。

それぞれ頭文字をとってR、J、Bと呼ばれている。

そして、それを討伐する特殊組織。“特殊生物に対する国際的な武力行使および地球環境保全に関する法律”が制定され、その法の名のもとに武力でもってレヴィアタンたちを退治する人たち。前身は自衛隊の一部が集まった組織だったが、今や各国の人間が入り混じった国際部隊だ。各国に支部が、そしてそれぞれ自治体に駐屯地があると聞く。

一般市民は討伐隊と呼んでいる。まあ、ある意味正義の味方だから。それでもヤツラによる死者や負傷者の数は減らない。

ヤツラは、弱点と呼べるものが無い。退治するときは、銃で蜂の巣にするのが普通…だと聞いた。

きつとさつきも、銃弾の嵐を降らせたのだろう。

「警報、解除されたみたいだね」

ゆつくりと委員長が立ち上がり、シエルのレバーをあげる。頼れる委員長の姿を見て、頬を赤く染める女子も多い。

「久野木くん、職員室に行ってくるね」

女子のクラス委員長である凜が、イケメン委員長の久野木くんに声をかけて教室を出て行った。

「小此木さん：大丈夫？」

「え、あ、うん」

ポケットと、凜の後ろ姿を見ていた為か、心配そうな声と顔の久野木くん。

こんな風に、学校が襲われることは珍しく、半年に一回程だ。その為に避難訓練や防衛策を考え、中心になるのはクラス委員長だ。有事の際は、クラスメートの人数確認と報告。これはまあ火事や地震の避難訓練と同じだが。

「私、凜のトコに行ってくるね」

言い捨てて教室を飛び出し、凜を追う。廊下を曲がってすぐ、階段を降りかけていた凜を捕まえた。

4つの思い

「凜！」

「え？音環？なんで？」

凜の隣に並び、顔を覗く。

「怒っちゃダメだよ。いつもの事じゃない」

「……………バレてたの」

苦笑して肩を竦める。

久野木くんは凜の彼氏だ。だが、みんなには内緒にしているため、相変わらずの人気は止まることを知らない。

黄色い歓声をあびる自分の彼氏にヤキモチを焼く凜は、可愛いなと思う。

「一緒に帰ろう？」

と誘えば、凜の笑顔が帰ってくる。どうせ授業はできないから、すぐに帰宅できる。

異形が出た地域は、何故か数日間には再び異形が現れる事はない為、つかの間の安心が得られる。いつまで続くのか分からない不安定な安心。いつか、この不安が晴れる日は来るのだろうか。

「音環は、彼氏作らないの？」

「え」

「美濃山くんとかどお？」

帰宅途中に突然そんな事を言い出した凜の意図が分からなくて混乱する。

美濃山くんて、確か久野木くんと仲の良い…？生徒会だっけ、その美濃山くんは？

「凜！」

質問の意図を探ろうとした時、後方から凜を呼び止める声。

久野木くんだ。

二人は周囲に交際を秘密にしている為、こつやって学校からかなり離れた場所で会っている。時々、私がここに居る事が申し訳無くなる時もあるけど。

「紘！」

パツと笑顔を咲かせる。相変わらず乙女度が高いなあ。

「凜、この前言ってた事話した？」

「話そうとしたら紘が来たの」

プイツとそっぽ向く。

その仕草に紘くんが苦笑する。イチャイチャするなら余所でやってくれ。ほんとに。

「音環ちゃん。今度の休みに遊園地行かない？」

「ペアチケットが余ってて、だから音環を誘おうと思ったの」

ペア？数がおかしくない？二人で行けば良いじゃないの。

「私達の分はあるの！でも二回も行けないし、せつかくだから音環に、と思つて」

「瞬も誘つて四人でどうかな？」

瞬：美濃山くん？だからさつき凜があんな事聞いてきたのね。気ま
ずい空気の人と一日過ごすのは誰だつて嫌なものね。

「いいよ」

「やったー！今度の日曜ね？」

ピョンピョンと楽しげに飛ぶ凜を微笑ましく見守る紘くん。

「音環ちゃん、ほんとに良かった？」

「いいよ？お互い仲良しの子呼んだんでしょ？そつちのが気ま
ずくなくて良いもんね？」

「ん…ま、そうだね」

何だか歯切れの悪い紘くん。私が何かマズイ事を言ったの
だろう。紘くん、あまり美濃山くんを誘いたく無いの
だろうか？いや、でも提示したのは向こうだし。美濃山
くんだったら、私も知らない仲じゃないし、大丈夫だ
と思っただけだな。

「それじゃ、日曜に駅の改札ね！可愛い服着てきてね」

「普通のオシヤレくらいするわよ！」

仲良く隣同士で手を振るカップルに別れを告げ、家路を急いだ。

朝の10時に駅に集合した私たちは、3駅向こうの遊園地に向かった。

話題はイロイロ尽きないが、やはり異形の化け物たちの話題は出て来ない。今日は大丈夫だろうか。遊園地そのものはドーム状の建物の中にあるから良いが、行き帰りが心配だ。

「小此木さん？どうしたの？」

「え？あ…ごめん美濃山くん。何だった？」

「いや…ボーツとしてみたいだったから。考え事？」

「まあね」

駅から遊園地までの道程を、考え事しながら歩くのは危ないなあ…私。

「空のこと？」

「え！」

「いつも空みてる…って会話を良く凜ちゃんとしてたから」

は…恥ずかしい…。まるで電波ちゃんみたいじゃないのソレ。

「深い意味は無いんだよ！ただ、小さい頃に見た絵本のような空が見たくて…」

「“ピッツの見る空”？」

「え…」

“ピッツの見る空”ピッツという小さな男の子は、空を見るのが好きで。空には色んな色があって、色んな表情をする。空の色と、見ているピッツの気持ちと同じだったり、違ったり。だからピッツは

毎日空を見る。空が好きだから。
という話の絵本だ。

「俺も小さい頃よく読んだから」

「う、うわー！！愛読者に初めて会ったー」

あまり人には理解されない所だと思っていた。まさか、美濃山くんの口からそんな言葉が出てくるなんて。少し驚いたと同時に嬉しい限りだ。

「ピッツ仲間だね」

「二人だけ？」

「ただいま会員募集中」

クツと美濃山くんが笑う。いつも眼鏡をかけていて、寡黙な感じなのかとおもいきや、結構喋るんだな、美濃山くん。いつも事務的な会話しかしなかったけど。

絵本の話題で盛り上がりながら歩いていたら、20分の距離などあったという間だった。

建築途中で頓挫していたドームを買い取り、その中に作られた遊園地は、化け物たちへの対策に他ならない。

「何から乗ろうねー？」

と目一杯はしゃぐ凧。微笑ましく見守る紘くん。

「小此木さんは苦手な乗り物ある？」

「無いよ？美濃山くんは？」

絶叫系も高い所も全然平気だよ、と伝えると、微妙そうな顔をする。まさか、苦手だったのかな？

「や、そういう訳じゃ無くて。えっと、瞬て呼んでくれる？苗字だと他人行儀で…」

「あ、うん」

瞬くんか…。何か改めて言われると照れるな…。

「あ、じゃあ私の事も名前で呼んでね？」

「うん。ありがとう」

何故、瞬くんがお礼を言うか？何だか微妙な空気が流れるじゃないか。

この空気をごまかす為に凜たちの方を向けば、米粒サイズになっていた。

「紘たち…あんなに遠く…」

置いてきぼりをくらった私たち。と、瞬くんの携帯にメールが届く。紘くんたちからだった。

「何て？」

「お昼に、鏡の迷宮の前で集合！…だつて」

「ちゃっかりデートして…」

何の為に四人で来たんだコラ。遠く、見え無くなった凜と紘くんを睨む。明日、絶対に購買のプリン奢ってもらわなくちゃ。

「…仕方ない。楽しもうか？」
「そうだね。せっかくだし」

まずはジェットコースターから！

「もう約束の時間だけだなあ」

「遅いね、二人とも……あ」

瞬くんの携帯に届くメール。それはやはり絏くんからで、もうすぐ鏡の迷宮から出るよ、と言う内容であった。

「…もう」

「ごめんね」

「瞬くんが謝る事じゃ無いよ！大体、何を企んでるの？二人ともいつもの凜と絏くんらしくない。こんなに他人を振り回す人たちじゃ無いのに。」

「俺が、頼んだんだ。二人に」

「……え？」

どういう事？と、瞬くんの顔を仰ぎ見た瞬間。

ドオオオオオン

爆発音が響き渡った。

出会い

ドーム内全体に響き渡る爆発音。

一瞬、目の前のアトラクションが　凜たちがいる場所が爆発したような錯覚を覚えるが、どうやら発生源は頭上かららしい。ただ事じゃない雰囲気周囲に立ち込めた。

「見て！あれ！」

頭上を見上げていた女性の一人が叫ぶ。示された指の先。

球体のドームの天井に、ポツカリと穴が空き…化け物の顔がヒョッコリと出ていた。

と、再び瞬くんの携帯が鳴る。

「絃か！？今何処だ？！………迷宮のクローバーの出口？分かった！すぐに行く。何があっても彼女を護れよ！」

慌ただしく携帯を閉じ、瞬くんは私を見る。

バタバタと人がドームの出口に向かう中、私の肩に手をやり力強く言い放つ。

「早く逃げて」と。

「嫌。私も行くわ？行かない理由が何処にも無い。危険度は皆同じじゃない！」

とても困った顔をした瞬くん。しかし、すぐに私の手を掴み走り出す。

「絶対に離れないで！」

と言いながら。

それに答えるように、私は強く握り返した。

逃げ惑う人の波に逆行しつつ、二人が向かうと言ったクローバーの出口を目指す。建物の中に居たら、この惨状は分からないかもしれない。館内放送で知って、避難するなら外では無く、非常用出口に向かうはずだから。普通の出口を指定したのなら、事態を把握できていない可能性がある。

「絃!!!日下部さん!!!」

「りーん!!!絃くーん!!!」

逃げる人たちの中、クローバーの出口からさほど離れていない場所に二人はいた。

二人も、私たちを探して逃げようとしていたようだった。

あと、十メートル。近ければ。

もしくはあと、数十秒。私たちが早く出会っていれば。

あんな事にはならなかったのに。

バサツと羽音が聞こえ、頭上の影が移動した。

仰ぎ見れば、」。大きく広げた翼。鉤爪は鋭く、その手足は爬虫類のよう。それを、大きく広げる。

何かを掴むように。

ハツとした。あいつは何を掴もうとしている？

考えるより先に身体が動き、瞬くんの手を振りほどく。鈎爪の先の人物を　凜を突き飛ばした。

ジクリ、と脇腹に焼けるような痛み。叫びそうな声は、獲物を掴んだJが急上昇したことによって飲み込まれた。

視界の端に、一気に遠くなる地面と、突き飛ばされ事態を把握できていない凜、呆然とする紡くん、叫びながら手を伸ばす瞬くんの顔が見えた。

しかし、それも一瞬で。Jはドームの穴から空へと飛び立った。

死ぬんだ、私。

Jに喰われるか、脇腹の出血で死ぬか。

それにしても、儂い。

呆気ない。

最期の場所として、空で死ぬるのがせめてもの慰めなんだろうか。

神様は、酷いよね。私から色んなものを奪ってにおいて、今度は私まで。私が“死者を想う”ことすら許してくれないのか。

目をつむる。

その瞬間に、グンと下降するJ。空から離される…。それがとても哀しかった。

地面に叩きつけられる事を覚悟していたが、Jは驚く程優しく私を地面に降ろした。

Jの顔らしき部分がグイッと近付き、私の脇腹を…痛む箇所を舐めた。衝撃的なシーンに固まっていると、ふと痛みが消えた事に気付く。

「な…治してくれたの？」

出血すら止まっている。どういふ事なのか？

「どうして？」

《会話ができるからだ》

「……え？」

目の前の異形は口らしきものを動かしていないのに、声のようなものが聞こえた。周囲に反響して聞こえたような、そんな錯覚を覚える音。

《お前と我の間に意思の疎通が可能だと感じたからだ》

「だ、だから…助けてくれた、の？」

《そう。お前は我々が憎いか？》

「……憎い」

本人の目の前で、あえて言う。だって、突然現れて、突然大切なものを奪っていった。これを憎いと言わずに何と言うのか。

《我々を止めて欲しい。我々は一つの意識を共有して存在するもの。我々は今、“暴走”と“殺戮”だ》

ややキーの高い声で話す目の前のJは、そう言った。たくさん個

体があっても、それ単体には意思は無い。一つの命令に対して忠実に動く多くのロボットのよう、異形たちはいるらしい。

「止めて欲しいって言ったって……」

そもそも異形を止めたいと思う人間が何人いると思っているんだ？この二十年の間に、人がどれだけ色々な対策をしたと思っているんだ？

《方法はある。先程、我々は一つの意識を共有して言った。ならば何故、我がお前を殺さぬのか》

そっか。全ての異形たちが殺戮と暴走に囚われているのに、こいつは違うんだ。

《我々は、言うなれば手足。頭では無い故に、理由は分からない》

それは、異形たちの存在理由・暴走した理由：そして、今、私を殺さない理由も含めるらしい。

《だが、我々の本質は暴走では無い筈だ。今、ヒトが行っている方法では止まらぬ。我々を眠らせて欲しいのだ》

人が行っている方法：異形に対して銃で蜂の巣にするやつ？あれではダメって？

《上手くは説明出来ぬが、我々は個体それぞれに核を持っている。それを破壊せねば、“暴走”を上書きされたままの核が、再び個体となる》

えーと、難しいけど、要は核を破壊すれば良いってこと？、そうしなければ、再生し続けるってこと？

《ああ。核が破壊されれば、減った個体数の分だけ“始まりの場所”で核が作られる》

そうして作られた核は、リセットされた状態だから暴走することも無いらしい。

「“始まりの…場所？”」

《それが何なのか、我々は知らぬ》

龍のような印象の、女性的な雰囲気を持つその異形。彼女は、ゆるく首を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672y/>

アドレサンス・コード

2011年12月12日00時52分発行